遼寧省山湾子出土の一括青銅器群

甲　元　眞　之

はじめに

一九七四年、遼寧省喀左県山湾子に於いて、二二点に及ぶ殷周青銅器がまとまって発見された。[1] このような殷末周初の青銅器が一括して出土するものとしては、一九四一年喀左県小城村南溝屯発見の例がはじまりで、[2] 大凌河上流域の喀左県内では、馬廠溝、[3] 鉆嶋溝、[4] 山洞村、[5] 小波汰溝[6]などが知られている。これら一括で発見される多数の青銅器群については、西周初期に於ける燕の建国と結びつけて、今日解釈されることが多い。[7] 北京琉璃河で西周初期の燕と関係する大規模な墓地が発掘され、[8] また付近には西周初期以前に遡上する古城址が存在していることが確認されて、[9] 一部で否定的であった西周初期の「北燕」の存在が考古学に実証されるようになってきた。[10] また馬廠溝出土の帯銘銅器の中に「匽侯」の銘をもつものがあり、それは燕と結びつくことから、大凌河上流域で発見される西周初期の青銅器群は、克殷後、北京周辺に封建された燕が、燕山山脈を越えて北征したときの記念物とみなされている。言い換れば燕が実行支配した領域の境界を示すものであり、北定の後にある種の祭りをとり行い、後それら祭器を一括して埋納したと想定されている。[11]

しかし、喀左県でみられると同様の埋納遺跡は、遼寧省朝陽県の木頭城子、大廟[12]でも発見されており、さらに義県[13]まで及んでいる。また赤峰の牛波羅、吉林省の克什克騰旗天宝同でも青銅器礼器の発見があり、[14] 西周初期の白浮村木槨墓で出土する特徴的な武器は、[15] 遼河中流の新民県でも発掘されていることなどからみると、[16] 遼河の西側にはこの種の遺跡がさ

らに点在している可能性が高い。こうした分布の広がりと密度の濃さは、それは燕侯による一時期の遠征とは考え難いことを示している。また蘆溝橋の「匽侯乍旅盂」銘をもつ銅器を中心とした一群[17]や牛欄山の青銅器群など[18]、北京周辺に於いても同様の遺跡がみられることは、さらにそれを予想させてくれよう。

西周初期の埋納青銅器を検討したときに、遼寧省出土の該期の青銅器群は、成王期と康王期の二時期に分けうることを示し[19]たが、山湾子や馬廠溝出土の青銅器の分析を充分行うことができなかった。このため山湾子や馬廠溝の青銅器群を二、三時期の異るものがあるものの、まとめて康王期のものとし、召公旨の軍事行動に随伴するものとしたために、燕侯の支配下に組み込まれた殷の遺民の問題を深く追求することができなかった。東北アジアに青銅器文化が波及するのは、この燕が北京に封建され、北方への進出を行ったことを契機とするものであり、東北アジアの青銅器文化を理解するためにも、西周初期の燕の動向が重要性をもっていることは言をまたない。

大凌河上流域で発見された青銅器群の中でも、北洞村の場合は、ほぼ同一時期の青銅礼器がセットをなし、しかも整然と窖蔵穴の中に埋納されていたのに対し、馬廠溝や山湾子では雑然と放置された状態で発見されており、またその礼器の組み合わせも不自然であって、異る時期の器物が混入している可能性がないわけではない。

馬廠溝で一括出土と伝えられる青銅器群の中に、異った時期のものがあることを指摘したのは陳夢家であった。馬廠溝出土一六点の銅器のうち、壺と鳥獸尊は異質なものとして、他の一四点が一組の完整な随葬銅器とみている[20]。山湾子出土品の中でも殷後期の作風に近いものがあって、二時期もしくはそれ以上の時期差をもつものが混在している可能性がないわけではない[21]。そこでここでは、報文があり、その一部が日本でも展示されて実見できた山湾子の青銅器群を例にとって分析をすすめ、遼寧地方にある西周初期の埋納遺跡につき再度検討してみたい。

遼寧省山湾子出土の一括青銅器群（甲元）

(二)

山湾子は喀左県城の南二五㎞、大凌河の上流が狭隘な河谷平野と起伏の激しい低丘陵を形成する付近の、東岸第一段丘上に位置する。一九七四年、農民が耕地整理を行っている最中に発見されたもので、長径が一・二mほどの方円形で、深さが〇・九mの土壙中に二二点の青銅器が放置されていたという。今、報告書に記された記述によって[2]、出土した二二点の遺物をみていくことにしよう。

①叔尹方鼎、口部縦一七・四、横一三・五、足高七・三㎝。外反する円い口唇部をもち腹部は下脹れ。口唇下に一条の凸弦紋をもつ。長辺部の口端にはやや外反する環耳がある（第1図3）。内底には「叔尹乍旅」の銘がみられる（第2図3）。

②鬲、口径一四・七、耳までの高さ一七㎝。円味を帯びた口唇をもち胴部の張る器形で、口頸部に二条の凸弦線をもつ。

③饕餮紋甗、口径二六、腹の深さ一六、耳までの高さ三七・三㎝。腹は口縁部が外反して環状の双耳がつき、腹の上部に二条の凸弦紋をもつ。甗足は胴の中央が強く脹み、饕餮紋で飾られる（第3図5）。腹内底に十字形孔が三組ある。

④戍甗、口径二五・三、腹の深さ一八・五、耳までの高さ四一㎝。やや外反気味の環状耳が直状にのび、方唇は外に少々開く。腹の上部に三組の饕餮紋による狭い紋様帯がめぐり（第3図6）、款足上部には肉厚の獣面紋が配される。内腹の上部には「戍●庋乍宝⿰阝尊彝」の銘文がある（●は未読）（第2図4）。

⑤伯矩甗、口径二五・五、腹の深さ一七・五、耳までの高さ四〇・八㎝。器制は④とほぼ同じ。頸部に三組の饕餮紋がめぐり（第3図3）、甗足には獣面紋がみられる（第3図7）。内腹の上部に「白矩乍宝⿰阝尊彝」の銘文がある（第2図1）。

⑥饕餮紋盂、口径三六、底径二五・六、高さ二四・五㎝。方唇で外反し、曲折する環状耳がある。胴下部には外開きの圏台がつく。口縁部と圏台には渦紋と半身の夔紋がめぐり、腹部には饕餮紋が飾られる（第3図10）。

⑦魚尊　口径二五・三、底径一五・五、高さ三七、腹の深さ二七・五㎝。器形は觚に近く、四ヶ所に棱脊がみられる（第3図15）。花紋は三段に分れ、各段の花紋は棱脊を鼻として主紋の間は雲雷紋で充たされる。頸部には四組の逆立した饕餮紋が配され、上腹、下腹、圏足とも夔餮紋が飾られる（第3図12、13、14）。圏足内部には「魚」の銘文がみられる（第2図2）。銘文と腹部に十字型の鑿孔を入れる手法などは、殷器の風格を帯びている。

⑧舟父卣、梁までの高さ三四、口径一四・五×一一・四、蓋の高さ一二・五、蓋の口径一七・六×一四㎝。蓋面の四周には二つの圏帯の間に夔餮紋を飾る（第3図8）。把手の根本には羊首を飾り、卣上部には羊首と小獣首を配す。器内底には「舟父甲」、蓋の内側には「車雋父丁」の銘文をもつ。銘文の風格から西周よりやや早い時期のものとする。

⑨渦紋罍、口径一六・五、底径一七・三、高さ三一・五㎝、頸が長く大きな圏足をもつ。胴中央の腹が最大に張り出す所に一条の凸帯がめぐり、肩には六点の円形渦紋が配される（第3図11）。

⑩牛紋罍、口径一七・五、高さ二九・五㎝。内傾する口縁で頸は高く、なで肩から底部にすぼみ、圏足に続く。頸と圏足には二条の凸弦紋、肩部に獣首の耳を配し、それと異る面には首を共有する二体の牛紋がある（第3図1）。

⑪史方罍　口部の縦一四、横一一・三、底の縦一五・二、横一一・五、高さ三五・七㎝。やや高い頸部に浅い獣面を施し、肩に二ヶの渦紋を四面に配して、前後二面には中央に小獣頭をもつ。肩部の紋様は二条の凸弦紋によって区切られて紋様帯をなし、方圏足には三条の凸弦紋がみられる。頸の内部に「史」銘あり（第1図1）。

⑫饕餮紋簋　口径二二・五、底径一八、高さ一五・二㎝。外反する口縁で腹下部が脹らみ外開きの圏台をもつ。両耳の下には珥がたれる。口径二二・五、底径一八、高さ一五・二㎝。外反する口縁で腹下部が脹らみ外開きの圏台をも

つ。両耳の下には珥がたれる。頸部には夔龍がめぐり、腹部には饕餮紋を飾る（第3図9）。圏足上の夔龍は双唇を下位に向け、器外底には斜方格紋がつけられている。内底に銘文があるが、亜字形の内部の文字は不明（第2図10）。

⑬父乙簋　口径二五、底径一九・四、高さ一八・三㎝。口唇は丸味を帯びてやや開き気味、獣形耳の下部に鉤状の珥がつく。頸部と圏台には三組の夔紋が組み合わさって饕餮紋帯をなし（第4図1と2）。腹部には斜方格雷乳紋が飾られる（第4図4）。耳には蟬紋が一つある。器内底には銘文四字あるが、後の「父乙」しか判読できない（第2図6）。前二文字はあるいは牝鹿の象形かもしれない。殷末から周初の器と考える。

⑭冖父甲簋　口径二四・五、底径一九・二、高さ一七・一㎝。口縁が突帯状に開き、腹下部が脹らむもので、まっすぐな圏台がつく。耳の下位に珥があり、頸部及び圏台に饕餮紋が配される（第4図3、5）。外底に方格紋があり、内底に「冖父甲」の銘がみられる（第2図9）。

⑮庚父戊簋　口径二二、底径一六・六、高さ一五・二㎝。口唇は丸くやや外に開き、下腹部が少し張る。口縁下と圏足には二組の夔龍が対称的に置かれ、腹部には大口で眉の大きな饕餮紋が飾られる。外底には額を接する獣面一組がある。この器の紋様は不鮮明で銘文もはっきりしないが、内底部に「庚父戊」の三字がみられる（第2図12）。

⑯直紋簋　口径二四・五、底径一九、高さ一七・五㎝。口唇は平たくかすかに外反する。頸部には渦紋と夔紋を組み合わせた紋様帯があり、腹部には縦の直線紋（第4図6）が、圏足には渦紋と四弁花紋がある（第4図7）。獣状をした耳のつくりは繁縟で、夔紋を施した珥がつく。内底部には「父丁□」の銘文あり（第2図8）。

⑰尹簋　口径一九・五、底径一七・八、高さ一五・四㎝。角ばった口唇をもちやや外反する。腹の最大径は下腹部にあって急激に脹む。腹部には紋様はみられないが、頸部と圏足には夔龍紋が配され（第4図9）。外底にははっきりとしない浅い花紋がみられる。その中に「尹」の文字が陽刻されている。

⑱雷乳紋簋　口径二六・六、底径二〇・一、高さ一八・一㎝。口唇部は突帯状に突出し、耳には鉤形の珥がつく。圈足はやや高く、外に開く。頸と圈足には四弁花紋と渦紋が組み合さった紋様帯をつくり（第4図8）、腹部は方格雷乳紋と円紋が飾られる（第4図11）。底部には棱形の網状紋がある。内底に「乍宝障彝」の銘文がある（第2図11）。重厚なつくりで、鋳造も精巧にできていて、山湾子出土簋の中でも最上の製品であるという。

⑲雷乳紋簋　口径二四・六、底径一七・六、高さ一六・二㎝。平口縁ですらりとした腹部をもち、やや高い圈台がつく。紋様には頸部と圈足部に雷紋を地紋として三組の夔龍紋があり、夔龍の身は細く尾を巻き上げ、夔龍の唇が合体する。腹部には斜方格の雷乳紋がある（第4図10）が、乳は小粒である。

⑳倗万簋　口径二〇・五、底径十六、高さ十四㎝。平口縁で外開きとなり、下腹部がやや脹らむ、圈台は高くその先端は棱をなし耳は比較的細く鉤形の小さな珥がつく。口縁下部には器の前後二ヶ所の小羊首があってそれを中心として、円渦紋と変体夔紋が並ぶ（第4図13）。圈足には雲雷紋を地紋として四組の夔龍紋が飾られる（第4図12）。外底には斜方格網状紋があり、内底には「倗万乍義妣宝障彝」と銘文がある。この器形は馬廠溝出土の「蔡」簋に近い。

㉑亶伯簋　口径一七・二、底径一八、高さ一四・七、圈足の高さ三㎝。直立する短い頸部をもち、最大径が腹部中央にあって、圈足は外反しない。獣首形の耳をもって、その下部に珥がつく。頸部と圈足には四組を対称させた斜角雷雲紋間に巻雲紋をもって飾る（第3図2、4）。器外底には斜方格紋がみられる。器の内底には銘文があり、「亶白乍宝障彝」と記す（第2図5）。

㉒盤状器　直径三二・五㎝、平口縁に八ヶの小孔がある。その孔の縁辺部は磨滅し長期の使用の痕跡を示す。饕餮紋盂の上に置かれて発見されたが用途不明。

(三)

以上のような青銅器群に対して報告者は、魚尊は殷代末期に遡上するものであるが、他はすべて西周初期の器物であるので、この山灣子の窖蔵址の年代は西周初期とする。また銅器の銘文にみられる徽号の不一致は、殷周革命の際に捕獲された殷器が、燕侯によりその部下に再配分された結果であろうとしている。[22] しかし、山灣子出土の青銅器が大部分西周期のものであるとすると、そうした再配分は起り得ないのであり、その編年観と自己矛盾をおこしている。また報告者は、馬廠溝出土の青銅器に比べ山灣子のものが新しいとするが、[24] 魚尊などをどのように択えるのか、今一度各青銅器の年代について検討してみる必要があろう。

二二点の青銅器のうち甗からはじめよう。三点の甗のうち戌甗と伯矩甗は口径も高さもほぼ同じもので、腹上部に三組の饕餮紋を組み合せて紋様帯を構成し、しかもその紋様も同一とみることができる。さらに甗足部の獸面紋も類似する。これら二点の甗と器制も紋様も極めて近いものとして、「戈父戌」甗（陳夢家『殷周青銅器分類図録』A一三七）があげられ、さらには琉璃河M二五三号墓出土の「匽甗」がある。[25] 款足部の獸面と同一の紋様は琉璃河M二五一墓出土の鬲の蓋と腹部にみることができる。この琉璃河の鬲には、

「在戊辰、匽侯易白矩貝、用乍父戌障彝」

の銘があり（第6図5）、器の作風と銘文の一致から、同一の作者の手になるものと考えられるものである。これらのことから、康王期の頃のものと考えられる。[27] 他方饕餮紋甗の甗足部の紋様は前二者に近いが、口径が大きく外開きとなり、内底に十字型の穿孔を有するなど、克什克騰旗天宝同出土の甗[28]や陝西省出土の陵罍[29]に近い。

鬲は袋部がやや脹らみ、頸部に二条の凸弦をもつなど、琉璃河M五〇号出土の鬲[30]と同一とみなしうる。M五〇号は西

周初期成王期のものである。[31]

魚尊は山湾子の報告者が指摘するように、殷代晩期の作風である。容庚の『商周彝器通考』[32]によれば、「魚」の銘文をもつものとして次の諸器があげられる。

魚鼎及び爵「魚」

魚父乙鼎及び卣「魚父乙」

魚父丁鼎及び尊「魚父丁」

魚作父乙尊「魚乍父乙宝障彝」

魚作庚尊「魚乍父庚彝」

魚作父癸尊「魚乍父癸彝」

魚父癸卣及び壺「魚父癸」

魚父丙爵「魚父丙」

また陝西省出土品に「魚父癸」や「魚」爵があり、[33]これらはいずれも殷末から周初の器であることからも、魚尊をその頃のものと考えてもいい。しかし、琉璃河M一〇四三号墓出土の爵に「魚魚」の銘文をもつもの[34]があり、器は殷風でありながらも、成王期にまで実際上は降るもので、[35]燕侯の支配下に編入された殷の遺民のものとすることができよう。

提梁卣の蓋と身の銘文が異ることは、本来別々の器がたまたま山湾子で組み合されたものと考えられよう。腹のやや中ほどが脹らむものは陳夢家のA五六五に近く、蓋もまたそれに似る。陳夢家は殷末周初の頃におく。[36] A五六五には「㐭父辛」の銘文があり、この徽号をもつものは、北洞村の埋納遺跡[37]や安陽の小屯、[38]陝西省礼村[39]その他での出土があり、殷末から成王期の頃にかけての器と知られる。

史方罍は肩部に二条の凸弦紋に挟まれて獣面をおき、その左右に渦文を配する方法や、肩部が丸味を帯びるなどの器制

は、陳夢家が殷代とする円渦饕餮紋方罍[40]に近く、他の二つの罍よりも時期の溯上するものである。

十点にも達する簋も二つの異った時期のものに弁別できそうである。まず直紋簋は容庚の二〇九戈簋[41]、陳夢家のA二一五、A一九六～一九八に大変類似しており、すべて殷器と考定されている。また庚父戊簋は陳夢家のA二〇三に、雷乳紋簋はA一五一にそれぞれ相通じるものである。饕餮紋と冂父甲簋はいずれも殷器の作風に近く、うち冂父甲の徽号をもつ例としては、古く孫壮の『澂秋館吉金図』二四にみることができ、近くは陝西省内の出土青銅器中にある[42]。以上の簋は従来の青銅器の年代観からすれば殷末のものであるが、琉璃河の墓地の時期区分からすれば成王期のものと考えられる。

残り四点の簋のうち、父乙簋は陳夢家のA一七四に類似し、倗方簋は馬廠溝出土「蔡」器に近い。「蔡」器は郭宝鈞の『商周銅器群総合研究』によれば[43]、西周初に比定されている。尹簋と雷乳紋簋は殷末よりは遅れる時期のものであり、亶伯簋も山灣子の報告者が述べるように降る時期と思われる。

このようにみてくると、用途不明の盤状器を除く二一点の山灣子出土青銅器群は、

鬲、饕餮紋甗、魚尊、提梁卣、史方罍、饕餮紋簋、冂父甲簋、庚父簋、直紋簋、雷乳紋簋、

の一群と

叔尹方鼎、戌甗、伯矩卣、饕餮紋盉、渦紋罍、牛紋罍、父乙簋、尹簋、雷乳紋簋、倗方簋、亶伯簋

のグループに分期することができる。これら二群は、琉璃河の燕墓地の出土品と分期との対比から、前者を成王期に、後者を康王期のものとそれぞれあてることができよう[45]。ともかくも、こうして山灣子出土青銅器群を二時期に分期することができた。

(四)

前述したように山湾子出土の青銅器群が二期に分期できると、各期それぞれに青銅礼器のセットが成立する。北洞村では一号、二号窖蔵の二基の埋納遺構で青銅礼器のセットが成立っており、総計十点で構成されることとも通じることとなる。また北洞村と同時期の北京市牛欄山で発見された埋納遺跡で、[46] 一二器の礼器が出土していることとも様相が似かよう。

このようにみてくると、青銅器が一六点以上、雑然と一つの窖蔵に放置されていたとする馬廠溝でも、二つの異った時期のものが混入している可能性があることが考えられる。例をあげるとすると、凸弦甗、饕餮紋簋などは古く、匽侯盂などは少し新しい時期に属するものとみることができよう。しかし、馬廠溝については短い報文があるだけで、委しく検討することができないため、二時期にわたるものがあることを指摘するにとどめたい。

大凌河上流域では割合と近接した場所に、こうした西周初期の埋納遺跡が存在している。山湾子から大凌河を挟んで西四kmに馬廠溝が位置し、北一〇kmで山洞村に至る。また山湾子から二〇km以内に洞上村鉆嚕溝があり、近年園簋や円鼎などを出土した小波汰、[47] 一九四一年に発見された南溝屯[48]も近い。このように半径が一五kmにもみたない喀左県内の同一地域に六ヶ所もの埋納遺跡があることは、征服地における支配領域の示威行為にしては理解に苦しむ点である。

次にこの問題について、銅器に記された銘文を手懸にして考えてゆこう。

成王期の北方進出時につくられたと考えられる北洞村[49]の埋納遺跡からは、次のような帯銘銅器が出土している。

「父丁孤竹亜兕」罍（第5図3）。

「丁亥、夙商又正娶要貝、才朋二百、娶辰夙商、用乍母己⿰阝尊」「亜㠱侯矣」方鼎（第5図1、2）。

「父辛」円鼎（第5図4）。

遼寧省山湾子出土の一括青銅器群（甲元）

「乍宝障彝」簋（第5図5）。

また山湾子の成王期の青銅器の銘文には次のようなものがある。

「魚」尊

「舟父甲」「車夷父丁」卣

「史」方鼎

「𠂤父甲」簋

次に康王期の帯銘銅器には、

「戊●厌乍宝彝」甗（●は未読）

「白矩乍宝障彝」甗

「□□父乙」簋

「尹」簋

「叔尹乍旅」方鼎

「倗万乍義妣宝障彝」簋

「亶白乍宝障彝」簋

がある。また成王期と康王期の二期に完全に分期できない馬廠溝では、

「魚父癸」簋（第6図4）

「蔡」簋

「匽甲乍餅盂」盂（第6図2）。

「史伐乍父壬障彝」卣（第6図1）。

「戈乍父壬障彝」卣（第6図3）。

の五器に銘文をみることができる。

これら銘文中から人名、氏族名あるいは氏族の徽号を拾うと、

山洞村　成王期　亜㠯　𡚬　娶　亜㠯侯矣　𠂤

山湾子　成王期　魚　史　冂　舟　車　隻　戊

康王期　戌　伯矩　叔尹　尹　倗万　亶伯

馬廠溝　成王期　魚　蔡　匽侯　史伐　戈

小沙汰　康王期　国

をあげることができる。

山洞村青銅器の「㠯」は滏県出土と伝える盂と蓋に、

「㠯乍康公宝障彝」

があり、康は康叔と考えられるので、これは成王期のものに比定されている。[50] 山洞村では「㠯」は亜字形の徽号をもつことから、殷民としうるであろう。白川静氏はこれを「敃」と解し、卜辞にみられる敃伯と同一視[51]している。

「𡚬」の銘文をもつものとしては、羅振玉の『三代吉金文存』七・二一・一に、

「𡚬易佳玉、用乍祖癸障、𣪘」

があり、他に、

「□𡚬易孝□、用乍祖丁彝」「亜㠯侯矣」（『三代』十三・三四・三）

「丁未、𡚬商征貝、用乍父辛彝」「亜㠯」（『三代』十六・四六・六）

「𡚬商小子夫貝一朋、用乍父己障彝」（『三代』十一・三一・七）

などがあって、殷末周初の人であることが知られる。

「娶」は「右正」という殷の官職を名のっているが、唐蘭はこの右正を「有政」に解し、事物管理にあたる有力者と考えている。[92] これにより「娶」は殷の高官であり、その徽号から㠱族に属するものであることがしられる。

「㠱」については陳夢家A五六五に「㠱父辛」の銘があり、さらに陝西省出土銅器に「㠱父丁」觚、「㠱父丁」簋、小屯殷墓出土のものに「㠱」爵があることからも殷民とするには疑問はない。

山灣子成王期の銘文にある「魚」は先に掲げたように殷民であることはいうまでもなく、「史」は殷の史官であったとされるので、同様に考えられよう。「𠂤」は陝西出土の殷器に「𠂤」卣をみることから殷の関係者であろう。「舟」は舟爵（『三代』十六・三四・五）にみられるように、殷の高官と考えうる。「車」については王辰の『続殷文存』に

「己亥、玑見事弔彭、車叔商玑馬、用乍庚宝⿰阝尊彝」

が収録されており、殷民である。白川静氏は「玑」を「𢦏」とするが、もしそうであれば、娶方鼎の銘文を介して殷の有力者であったことが窺える。また馬廠溝でみられる「魚」「史伐」「戈」も殷との結びつきが強いとみることができる。

康王期のものでは、「戍」「尹」も陳夢家は殷の職官であったとするので殷との関係あるものとみられるが、「倗」には類例がなくその出自は不明。「伯矩」は琉璃河の燕墓地で二点の帯銘銅器が出土している。この他「伯矩」については、唐蘭が十六点の銘を集めていて、殷末周初の人であったことが分る。なおこの「伯矩」の銘をもつものの中に、

「癸白矩乍宝⿰阝尊彝」盤

があり、伯矩の氏族が「癸」であることが窺える。小波汰で知られる「箙」も河北省南部出土の殷末の銅器[93]にその名がみえることから、これも殷に近い存在であることが知られよう。「蔡」は尊に、

「王才魯、蔡易貝十朋、対揚王休、用乍宗彝」

があって、あるいは魯の支配下に組み込れた東夷の一族かもしれない。「亶伯」については類例がなく不詳。

このように、遼寧省出土の青銅礼器に記された人名、氏族名、もしくは徽号からすれば成王期のものはすべて殷の余民や殷の支配機構下にある民であり、康王期のものの知られるものは殆んど殷の関係者であることが分る。これらの中で「魚」「戈」および亶族は、西周初期の燕の共同墓地である琉璃河で出土する銅器にその名を示すこと、及び、蘆溝橋出土の盉に、

「匽侯易亜、用乍父乙宝⿰阝尊彝」

と㠱族が燕の支配下にあったことを示す銘文があることなどから、遼寧省出土の青銅埋納遺跡は、すべて燕と関係することで出現したという従来の説[58]は正しいものとみることができる。この際、魯が殷民六族（條、徐、蕭、索、長勺、尾勺）を、衛が殷民七族を分与された例が参考となろう。燕侯が殷民を引率して北方への軍事行動を起したことが知られるのである。

一方、山洞村、山湾子成王期、山湾子康王期、馬廠溝の四つの埋納関係遺跡でみてゆくと、そこに出てくる人名、氏族の中で、両方にまたがってみられるのは、「魚」だけである。ところが馬廠溝の「魚父癸」簋が匽侯盂などとともに康王期のものとすれば、四者で共通してみられるものは皆無である。このように地点と時期によって別々な集団が組織されていたことは、燕の支配下にある集団が同時多発の軍事行動にでたためであるのか、あるいは個々の埋納遺跡の年代に少しずつのずれがあり、燕侯の指揮のもと、長期間にわたっての持続的な北征であったのか考えなくてはならない。

北京市牛欄山でも遼寧省内と同様な埋納遺跡が発見されている。そこで出土する帯銘銅器の銘文にみられるものは「㠱」族に関係するものばかりであり、北洞村に㠱族を示すものが多いことは、第一次の燕の北方進出は、まず㠱族を中心とした集団にってなされたと考えることができよう。北洞村や牛欄山出土の銅器は、山湾子や馬廠溝のものと比べ、古い要素を多くもっているからである。北洞村の埋納銅器が整然と窖蔵坑の中に置かれていたことは、第一次の北方進出が、大凌河上流域で一たん停止し、ここを領域支配の境界となしたかのようである。その後改めて山湾子馬廠溝の青銅器にみ

られるように少し時期を異にする北征があって、大凌河上流域が本格的支配地に組み込まれた。

琉璃河墓地にみられる成王期と康王期の大きな異りは、成王期の墓の副葬品が殷的な青銅礼器を中心とするのに対し、康王期のものでは礼器以外に武器を多くもつことがあげられ、その武器の中にも中国在来のものとは考え難い有柄式銅剣をもちはじめることである。[38]

有柄式銅剣はアルタイ以西にその出自が求められるもので、殷末には山西省から遼寧省南部にかけての地に、点々と分布をみせるようになってくる。康王期の墓にこうした武器が保有されるようになったことは、有柄式銅剣をもつ民族との対峙から、自ら新しく武装化してこれに備えた燕の対応を読みとることができるし、遼河中流の新民県で、康王期の墓の副葬品と同様な武器が出土することは、[39]そのことを如実に物語るものといえよう。

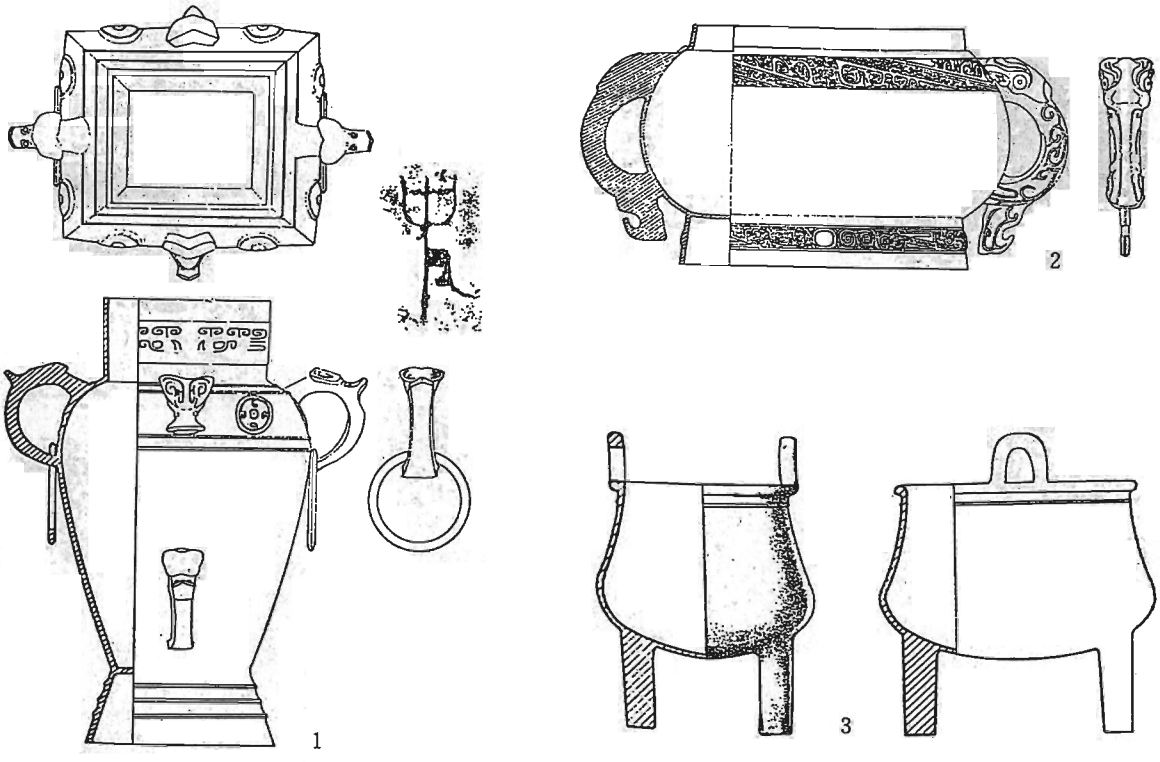
北方有柄式銅剣を使用する民族との対峙から、康王期には再度燕山の北へと進出して行かなければならなかった。山湾子や馬廠溝で時期の異る銅器が雑然と放置されていたことは、戦勝記念としての祭も緊急時に行われたのであり、康王期の青銅器が遼寧省義県や新民県にまで及ぶことは、その間のあわただしい状況を示すものといえよう。

同一地域に六ヶ所も埋納遺跡がみられることは、このように時期を多少異にして形成された可能性が高い。このような燕の対応をもたらした有柄式銅剣をもつ民族の動きも、同時に解明しなければ、そのメカニズムは明らかにしえないが、この点については稿を改める必要がある。

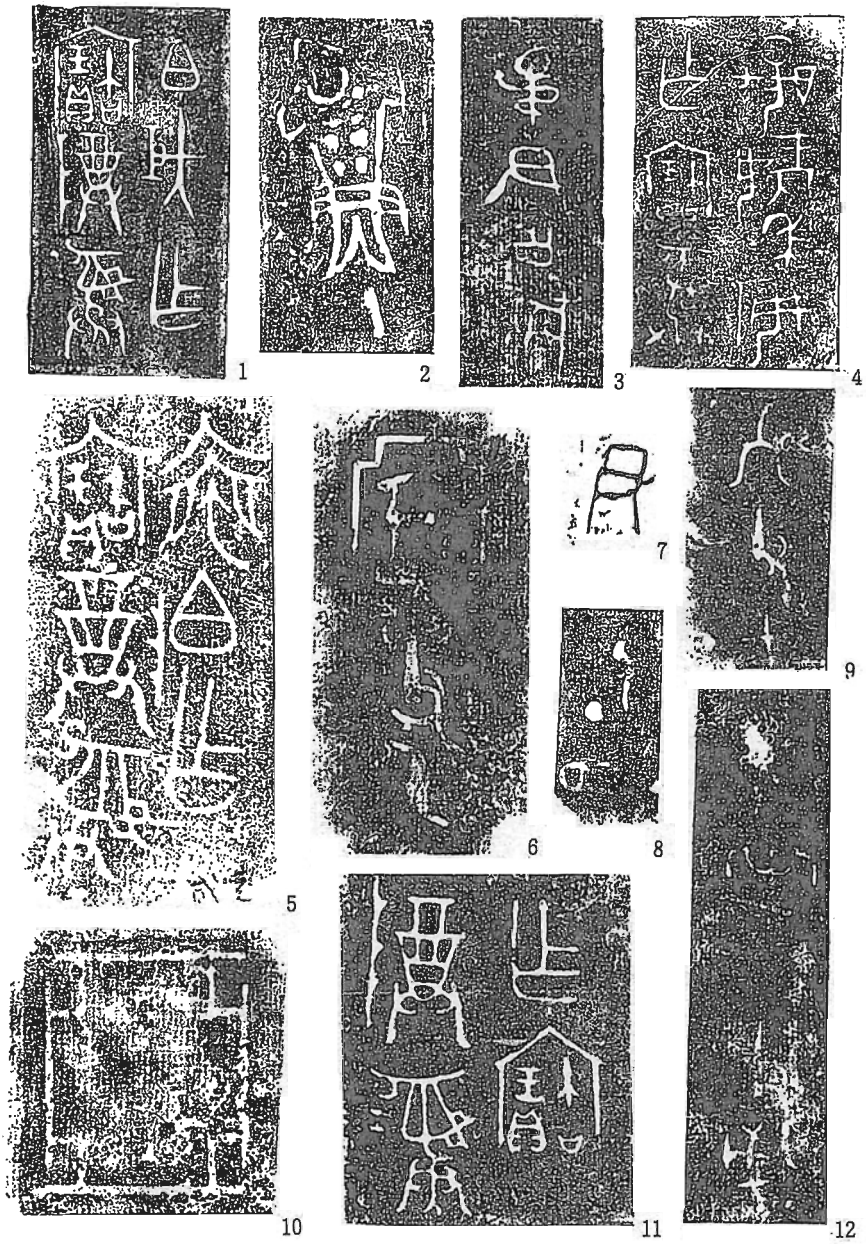
註（1）喀左県文化館他「遼寧喀左県山湾子出土殷周青銅器」『文物』、一九七七年十二期。
（2）陳夢家「西周断代」『考古学報』十冊、一九五五年。
（3）熱河省博物館「凌源県海島営子村発現的古代青銅器」『文物参考資料』一九五五年八期。
（4）遼寧省博物館文物工作隊『概述遼寧省考古新収穫』『文物考古工作三十年』、北京、一九七八年。
（5）遼寧省博物館他「遼寧喀左県北洞村発現殷代青銅器」『考古』一九七三年四期　北洞村文物発掘小組他「遼寧喀左北洞村出土的殷周青銅器」『考古』一九七四年六期

(6) 註(4)に同じ。
(7) 晏琬「北京、遼寧出土銅器与周初的燕」『考古』、一九七五年五期。
北京市文物局考古隊「建国以来北京市考古和文物保護工作」『文物考古工作三十年』、北京、一九七九年。
中国社会科学院考古研究所『新中国的考古発現和研究』、北京、一九八四年。
(8) 琉璃河考古工作隊「北京附近発現的西周奴隷殉葬墓」、『考古』、一九七四年五期。
中国科学院考古研究所「一九八一年—一九八三年琉璃河西周燕墓地発掘簡報」、『考古』、一九八四年五期。
(9) 註(7)に同じ。
(10) 伊藤道治『中国社会の成立』、東京、一九七七年。
(11) 白川静『金文通釈』四六、京都、一九七七年。
(12) 註(4)に同じ。
(13) 註(4)に同じ。
(14) 克什克騰旗文化館「遼寧克什克騰旗天宝同発現商代銅甗」、『考古』、一九七七年五期。
(15) 北京市文物管理処「北京地区的又一重要考古収穫—昌平白浮西周木槨墓的新啓示」、『考古』、一九七六年四期。
(16) 註(1)に同じ。
(17) 註(2)に同じ。
(18) 程長新「北京市順義県牛欄山出土一組周初帯銘青銅器」、『文物』、一九八三年十一期。
(19) 甲元眞之「燕の成立と東北アジア」『東北アジア考古学研究会記念論集』、東京、一九八九年。
甲元眞之「西周初期燕の埋納遺跡」『百済研究』第十七巻、大田、一九八九年。
(20) 註(2)に同じ。
(21) 註(19)に同じ。
(22) 註(1)に同じ。
(23) 註(1)に同じ。
(24) 註(1)に同じ。
(25) 註(8)に同じ。
(26) 註(8)に同じ。
(27) 註(19)に同じ。
(28) 註(14)に同じ。
(29) 陝西省考古研究所他『陝西出土商周青銅器』(一)、北京、一九八〇年。

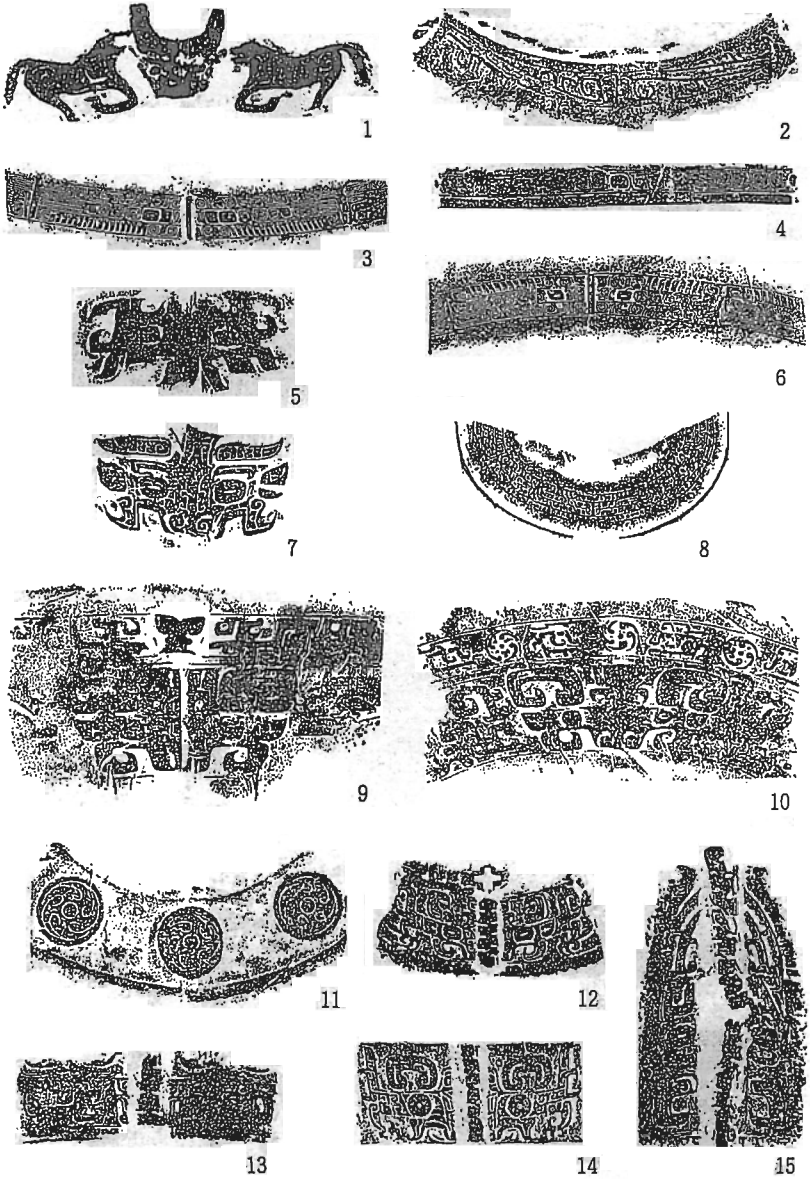
(30) 註(8)に同じ。
(31) 註(19)に同じ。
(32) 容庚『商周彝器通考』、北京、一九四一年。
(33) 陝西考古研究所他『陝西商周青銅器』(一)、北京、一九七九年。
(34) 註(8)に同じ。
(35) 註(19)に同じ。
(36) 陳夢家『殷周青銅器分類図録』東京、一九七七年、原著、中国科学院考古研究所編『美帝国主義却掠的我国殷周青銅器図録』北京、一九六〇年。
(37) 註(5)に同じ。
(38) 中国社会科学院考古研究所「安陽小屯村北的両座殷代墓」『考古学報』、一九八一年四期。
(39) 註(33)に同じ。
(40) 註(36)に同じ。
(41) 註(32)に同じ。
(42) 註(36)に同じ。
(43) 註(33)に同じ。
(44) 郭宝鈞『商周銅器群総合研究』、北京、一九八一年。
(45) 註(19)に同じ。
(46) 註(18)に同じ。
(47) 註(4)に同じ。
(48) 註(2)に同じ。
(49) 註(1)及び(19)に同じ。
(50) 唐蘭『西周青銅器銘文分代史徴』、北京、一九八七年。
(51) 白川静『金文通釈』巻六、京都、一九八〇年。
(52) 註(50)に同じ。
(53) 石家荘地区文化局文物普査組「河北省石家荘地区的考古新発現」『文物資料集刊』一、一九七七年。
(54) 註(2)に同じ。
(55) 註(7)及び町田章「殷周と孤竹国」『立命文学』四三〇、四三一、四三二号、一九八一年。
(56) 註(19)に同じ。
(57) 註(1)に同じ。



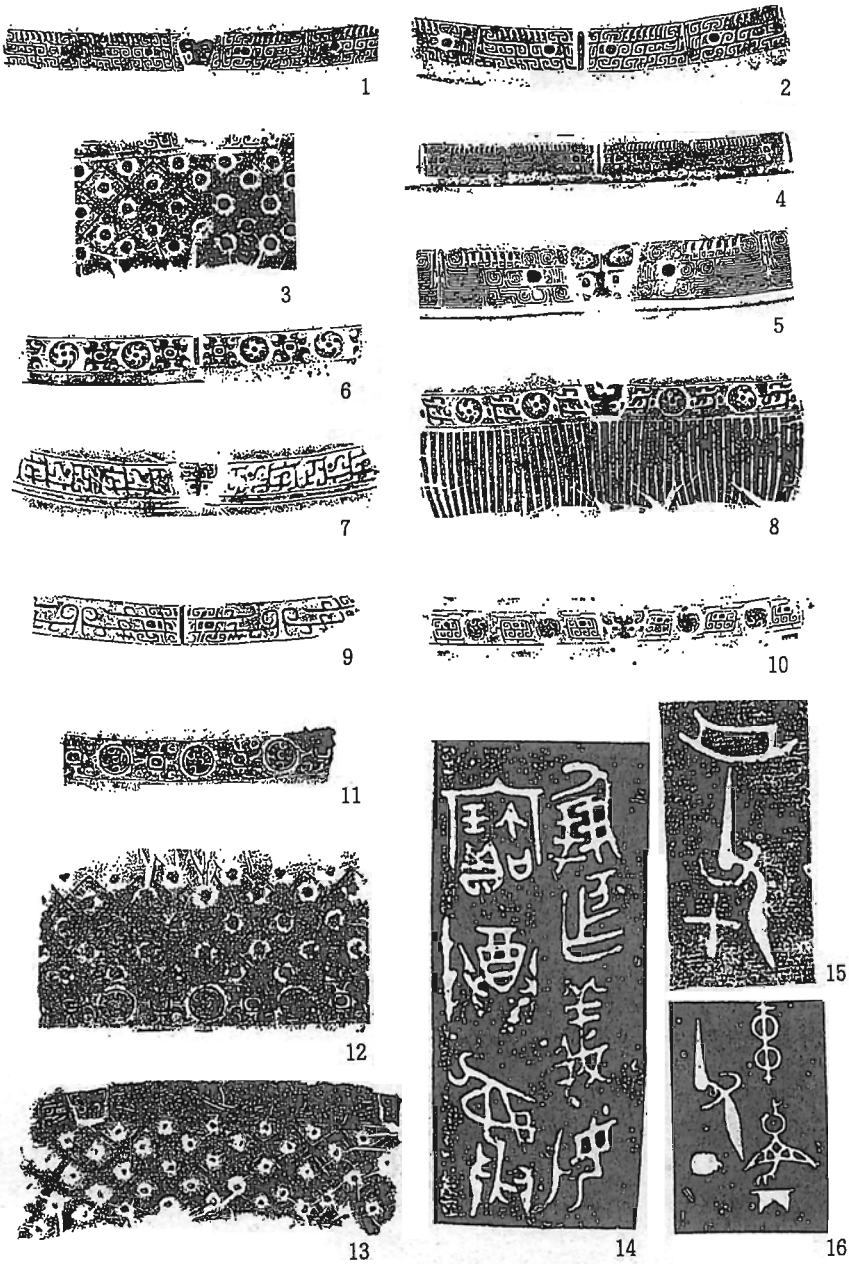
第１図　山湾子出土の青銅器



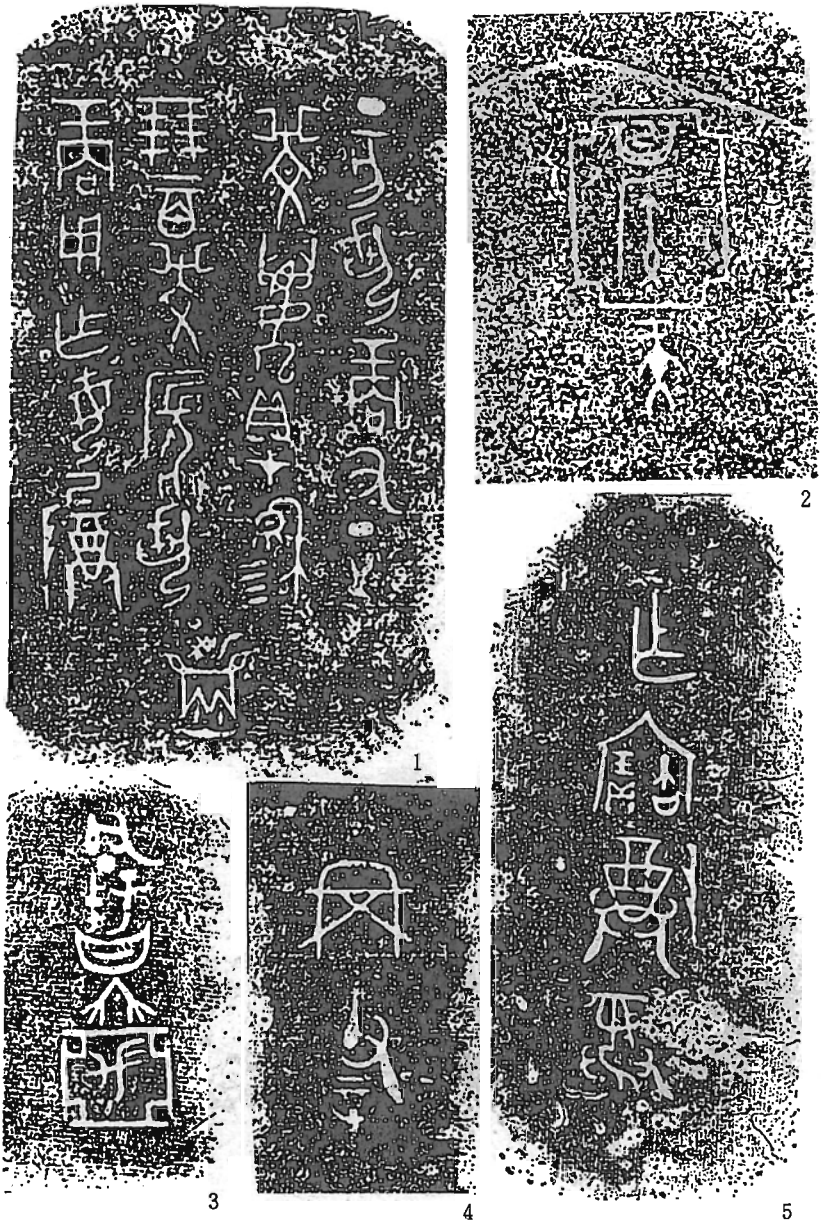
第２図　山湾子出土の帯銘銅器銘文



第3図　山湾子出土銅器紋様



第４図　山湾子出土銅器紋様及び銘文



第５図　山洞村出土帯銘銅器銘文

1

2

3

4

5

第６図　馬廠溝及琉璃河出土帯銘銅器銘文